

15. 動物を介在した子供達への支援 長野県動物愛護センターの不登校児童生徒支援事業

松澤淑美、小木曾悦人（長野県動物愛護センター）

キーワード：動物、不登校、アニマルアシステッドセラピー、ハローアニマル

要旨：長野県動物愛護センター（以下ハローアニマルとする）は、動物について学び、ふれあいを通して命の大切さや相手を思いやる気持ちを育み、人にも動物にも優しい社会を築くことを目的として、動物を介在した様々な事業を行っている。特に、子供達を対象とした取り組みについては、教育・医療・福祉関係機関と協働し子供達のより良い成長と発達のための支援を実施している。今回、医療と協働し動物介在療法（アニマルアシステッドセラピー）（以下 AAT とする）による不登校児童生徒支援事業「ハローアニマル子どもサポート（以下子どもサポートとする）」を実施したので報告する。

A. 目的

ハローアニマルは、長野県下の保健福祉事務所に保護された犬及び猫を引き継ぎ、不妊措置、健康管理、マイクロチップの挿入後、新たな飼い主への譲渡を行っている。これら動物の愛護と福祉を目的とした事業と同時に、引き継ぎをした犬及び猫の中から、適性があると認められた個体を選定し動物ふれあい活動を行うことによって、人の心と体を支える様々な事業を行っている。また、うさぎ、モルモット、ヤギを飼養し、犬猫以外の身近な動物についても学べる施設となっている。

人に対する事業の中で、特に子供達を対象とした「動物ふれあい教室」「いのちの授業」「学校飼養動物支援事業」「職場体験」などは、動物に対する正しい知識を学びふれあいを通じて優しい気持ちを育むことを目的として日常的に実施している。また、特別な支援を必要とする子供達に対しては「おれジョブ」の受け入れも行っている³⁾。

今回は、不登校児童生徒に対する取り組みを紹介し、平成 28 年度の実施状況を報告する。

B. 方法

(1) 経過

2000 年開設以来、不登校児童生徒と動物とのふれあい場所を設けて受け入れを行ってきた。2005 年に心療内科医との共同研究により「ハローアニマル子どもサポートプログラム」（以下プログラムとする）（表 1）を作成し、各ステージ毎に心理テスト（POMS、AN-EGOGRAM）を行ったところ、心理状態の改善と自我状態の安定傾向が認められた¹⁾。2014 年から唾液アミラーゼ測定（表 2）によるストレス評価を行い、ステージ I でふれあう動物を対象児童生徒のストレスが軽減した個体を選定してプログラムを実施した²⁾。

(2) 平成 28 年度実施状況

ア 実施期間：2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日
イ 対象者：平成 28 年度子どもサポート対象者 33 名

内訳：小学生 8 名（男 2 名、女 6 名）中学生 15 名（男 5 名、女 10 名）高校生 6 名（男 4 名、女 2 名）成人 4 名（男 1 名、女 3 名）計 33 名（男 12 名、女 21 名）

ウ プログラム実施手順

- ① 教育関係機関（主に教育事務所のスクールソーシャルワーカー（以下 SSW とする））からの依頼
- ② 事前に対象者に関する情報を収集（動物飼養経験、動物アレルギー、動物虐待の有無等）
- ③ ハローアニマル施設見学、対象者の動物に対する反応を観察、記録
- ④ 対象者の希望を確認し、原則として毎月 1 回 1 時間プログラムを実施
- ⑤ 実施内容を依頼先へ報告

表 1 ハローアニマル子どもサポートプログラム

ステージ	内容	効果
I	そのままの自分 動物と一緒に過ごす 動物とのふれあい（唾液アミラーゼ減少の個体を選定）（3回）	緊張緩和、リラックスの体験、動機づけ、安心安全な居場所、癒し、共感、安全なスキンシップ、
II	必要とされている自分 ハローアニマルの仕事体験（3回以上） 幼齢動物の社会化・順化、給餌、運動、遊び	自己有用感、自尊感情、感情表出、感情の受け渡し、相互交渉、コミュニケーションの練習
III	自分の役割 特定の個体の世話 犬のトレーニング	充実感、満足感、達成感、開放感、責任感、信頼感
IV	社会参加 ボランティア活動	社会への適応

表2 唾液アミラーゼ測定方法

測定装置	素分析装置「唾液アミラーゼモニター」 テストストリップ；ニプロ(株)
測定方法	テストストリップ先端の唾液採取紙で 口腔内舌下部から30秒間直接唾液を採 取後モニターにセットし測定する。測定 はプログラム実施直前と直後に行う。

- ⑥ 毎月、心療内科医による公開講座を開催し希望者には個別相談を実施
- ⑦ 支援関係者と情報共有、対応の検討、効果の検証等

C. 結果

受け入れを行った33名は、プログラム開始前17名が相談室や中間教室等の支援を受け16名は在家だった。プログラム実施後、在家16名のうち15名がハローアニマルに定期的に通うことが可能となった。そのうち9名は相談室や中間教室等にも通えるようになった。1名は既に引きこもりの状態が長期化しており1度もハローアニマルに来ることができず現在も在家である。

平成29年3月末現在の状況は、ステージⅠが12名（内成人2名）、ステージⅡが11名、ステージⅢが5名、ステージⅣが4名（内成人2名）であった。

D. 考察

長野県教育委員会より、平成27年度県内小・中学校の不登校児童生徒数は2,209名（在籍比1.26%）で全国の在籍比より高い状況にあると報告された。子どもたちの社会的な自立を支援するためのガイドブック「不登校への対応の手引き」が作成され、SSWのコーディネートによって学校と他の支援機関の協働支援体制を構築する必要性が示されている。

ハローアニマルの子どもサポートにおいても2014年以降SSWからの依頼が定着し、多面的多角的な支援におけるハローアニマルの役割分担が明確になった。ハローアニマルは「動物」という社会資源を活用し、対象児童生徒と保護者への心理的な支援を担っている。

過去に実施した心理テストの結果から、ハローアニマルを希望する対象者は、人に対する緊張が強く、自分を抑え、感情表出を不得手とし、集団への不安を感じやすい傾向にあった。そのため、プログラムのステージⅠでは、適性のある動物とリラックスしてふれあうことのできる安全な場所を提供し緊張が緩和することを目的とした。唾液アミラーゼの測定結果から、ふ

れあう個体を選定するので自分に合った個体とのマッチングができ、リラックスしやすかったと考える。唾液アミラーゼの測定は、その場で客観的にストレスを数値化して評価することができるので、対象者本人の自覚を促すことに活用できた。在家の子供達においては「動物がいるから行く」という動機づけとなり、家から出るきっかけとなった。

プログラムのステージⅡでは、ハローアニマルの仕事体験してもらうことで自己有用感を得ることを目的とした。特に保健福祉事務所から引き継いだ犬及び猫を、新たな飼い主に譲渡するためには「幼若動物の社会化・順化（人に馴らすこと）」が必要である。ハローアニマルスタッフ以外の人間の子供が実際に携わることは、様々な家族構成の家庭に譲渡される動物にとって大切な体験となる。子供達は、譲渡される動物の幸せと新たな飼い主家族の幸せ双方に貢献している。

ステージⅢでは、更にハンドリング技術を学び、特定の個体の世話や犬のトレーニングを行って自分の役割を果たした。

ステージⅣでは、イベントの手伝いなどボランティア活動ができるようになった。

このように、プログラムはステージⅠからⅣまでであるが、ステージⅢになると自ら動けるようになりハローアニマル以外の場所に出でいけるようになる場合が多く、今回の9名もプログラムが終了する前に相談室等に通うことが可能になった。

ハローアニマルは、17年間で287名の子供達の受け入れを行った。時々、成長した子供達が姿を見せてくれることがあり、我々職員の癒しとなっている。

今後もハローアニマルの「動物」という資源を活用し、社会貢献に寄与したい。

E. 利益相反

利益相反なし。

<参考文献>

1. 飯田俊穂, 他: 学校不適應傾向の児童・生徒に対するアニマルセラピーの心理的効果についての分析. 日本心身医学会誌 Vol.48: 945-954, 2008
2. 松澤淑美, 他: 唾液アミラーゼによる評価を活用した不登校支援. 平成27年度全国動物管理関係事業所協議会全国会議研究発表会, 2015
3. 松澤淑美, 他: 動物愛護センターの新たな役割～福祉関係機関との協働～. 平成28年度全国動物管理関係事業所協議会関東甲信越静ブロック研修会, 2016